

(workshop)

「まりボール」で「まりトーク」

Mariko Suzuki and Sachiho Mori

学習者の **Affective filter** が高いと言語学習の妨げになることは、**Krashen(1982)**を初め、多くの研究者に言及されている。学習者の心や体をほぐし **Affective filter** を低くして学習者が本来持っている言葉を引き出しやすくすることが教師の大切な役目の一つと言える。

筆者たちは、心と体をほぐし、しかも、同時に言葉を引き出すことのできる活動を授業の中に取り入れることを考え実践している。こうした活動の一つが「まりボール」で「まりトーク」である。この活動は、「作文に書くことが無い」という多くの学生たちを何とかしたいと、2001年に鈴木真理子が作文の導入に考えた活動である。ボールに書いてある言葉の連想から自分の経験や気持ちを話すことで自分の中に潜んでいる言葉を引き出し広げることができ、楽しく作文を書くことができた学生の評価を得ている。2008年現在、森幸穂が留学生の交流活動に活用しているほか、学習現場で会話、スピーチ、発音の導入にも使われている。

「まりボール」で「まりトーク」という命名は、まるい心でリラックスして言葉を発するという意味と毬と考案者の名前をかけたものである。ボールのやり取りと言葉のやり取りで、体と心と頭がまるくなるので、場を和やかにするコミュニケーションツールとして広がりを見せている。人が集まる場で、人が心を通わせるきっかけに手ごろな活動である。そもそも、言語学習の目的は学習のための学習ではなく、人と人とのつながりを持つためのものである。小さな手毬「まりボール」があるだけで、人と人をつなぐきっかけとなり、さらに言語学習へとつながっていく確かな手ごたえを筆者たちは感じている。

今回は、言葉を引き出しながら人と人をつなぐツールとして「まりボール」を紹介する。筆者たちが教育の場で、どのように活用しているのかを参加者の方に体験してもらい、学習者の様子や声も画像で紹介しながら、「まりボール」で「まりトーク」のさらなる可能性を検討していきたいと考えている。